

160 復活についての問答

ルカによる福音書 20 : 27~40、マタイ 22 : 23~33、マルコ 12 : 18~27

27 さて、復活があることを否定するサドカイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに尋ねた。

→民衆がファリサイ派を支持していたこともあり、サドカイ派（サンヘドリン[71人構成：議長一世襲制の大祭司一と副議長が各1人、議員69人、計71人]の過半数を占めていた）の人々はファリサイ派の意見に従うことが多かった。

→聖書に「ファリサイ派」は95聖句（98回）、「サドカイ派」は14聖句（14回）に登場し、ファリサイ派がユダヤ社会に与えた影響は大きい。

【参考】 富裕層の支持が多いサドカイ派 →ヘレニズム（＝ギリシア風）文化に対して柔軟

中間時代に誕生したサドカイ派は、その名を祭司の主流派、ツアドク（ザドク）に由来し（サムエル記下20 : 25、列王記上 1 : 38~44）、神殿詣（神殿信仰）に重点を置き、そこで犠牲を献げることを教えた。裕福な上流社会のユダヤ人（サムエル記下 20 : 25、列王記上 1 : 39~45）一祭司、教養のある金持ち、貴族階級に属する人々でファリサイ派と対立した。彼らは、モーセ五書（トーラー）のみ（ファリサイ派の口伝律法を認めない）をファリサイ派のように多くのこじつけ議論等に陥ることなく非常にまじめに解釈した。ファリサイ派との違いは、サドカイ派は神が人々を死後によみがえらせることが律法に記されていないことから、天使、悪霊、魂の永遠性、死後の世界や復活を信じず、終末論の死後の世界に対する信仰もなかった。サドカイ派はファリサイ派と異なり、政治的には既得権益を守るために親ローマであったため、一般大衆の支持がなかったが、宗教と政治の面では力（神殿礼拝、神殿ビジネスの完全支配→∴AD70年のエルサレム滅亡と共に消滅）があり、非常に影響力があった。

28 「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。

→∴寡婦の経済手的社会的地位を守るため。

→申命記 25 : 5~6

兄弟が共に暮らしていて、そのうちの一人が子供を残さずに死んだならば、死んだ者の妻は家族以外の他の者に嫁いではならない。亡夫の兄弟が彼女のところに入り、めとって妻として、兄弟の義務を果たし、彼女の産んだ長子に死んだ兄弟の名を継がせ、その名がイスラエルの中から絶えないようにしなければならない。

29 ところで、七人の（男）兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、子がないまま死にました。

30 次男、（→聖書で最も短い聖句：「次男、」の3文字、2番目はヨブ記 3 : 2「言った。」の4文字）

31 三男と次々にこの女を妻にしましたが、七人とも同じように子供を残さないで死にました。

32 最後にその女（→長男の妻）も死にました。

33 すると復活の時、その女はだれの妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」

→サドカイ派は復活を信じていなかった。

34 イエスは言われた。

「この世の子らはめとったり（→娶ったり：妻として迎えたり）嫁いだりするが、

35 次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしい（→相応しい）とされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。

→エフェソの信徒への手紙 1 : 21

すべての支配、権威、勢力、主権の上に置き、今の世ばかりでなく、来るべき世にも唱えられるあらゆる名の上に置かれました。

→マタイによる福音書 24 : 38

洪水になる前は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた。

→テサロニケの信徒への手紙二 1 : 5

これは、あなたがたを神の国にふさわしい者とする、神の判定が正しいという証拠です。あなたがたも、神の国のために苦しみを受けているのです。

→来たるべき王国の時代と命の復活は、ふさわしいとされた信者たちにとって、永遠の祝福と永遠の命を受け継ぐことになる(マタイ 19 : 28~29、ルカ 18 : 29~30)。

36 この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。

→イエスは、人々が復活し、天使のように永遠に生きると教えた。

→マタイによる福音書 22 : 29

イエスはお答えになった。「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、思い違いをしている。」

【参考】復活の体に関する教え

1. 復活の体（栄化された体）は地上の延長線上にあるのではなく、質的に新しくされたものである。それは天使のように、朽ちない、永遠に存続する体である。
2. 復活の体は死ぬことがないので、結婚する必要がなく、両者の関係は、全く新しいものとなる。
3. 信者（信仰によって義とされた者）のみが復活に与かる。
4. 復活の体は、神の子であることの証しである。

37 死者が復活することは、モーセも『柴』の箇所（→モーセの召命：出エジプト 3 章）で、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、示している（→明らかにしている）。

38 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである。

→上記聖句では「主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで」とモーセが呼んだ、とあるが、これは「出エジプト記 3 : 6」から分かるように、モーセが呼んだのではなく、神が言われた言葉である。→（リビング・バイブル）しかし、あなたがたがほんとうに聞きたいのは、復活があるかないかということでしょう。モーセ自身は何と書き残していますか。燃えさかる柴の中に現れた神とお会いした時、モーセは神を、『アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神』（出エジプト 3 : 6）と呼びました。主を彼らの神と呼んでいる以上、彼らは生きているはずですが、神は死んだ者の神ではありません。神に対して、みなが生きているのです。

→出エジプト記 3 : 6

神は続けて言われた。「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である（NIV/NKJV : “I am the God of your father, the God of Abraham, the God of Isaac and the God of Jacob.”）。」モーセは、神を見ることを恐れて顔を覆った。

→サドカイ派の人たちは、教理の書として、「モーセ五書」のみを認め、そこには復活の教えはないと信じていた。しかし、イエスは、「モーセ五書」にも復活の証しがあると示された。

- ①神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。
- ②神がモーセに語りかけた時には、アブラハム、イサク、ヤコブは死んでいた。
- ③神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。
- ④従って、アブラハム、イサク、ヤコブは生きている。
- ⑤もし、そうでなければ、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」ではなく、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神であった」という表記になる。

